

# 夢湧、夢に夢中

第7号

令和6年7月12日 文責：大谷

## 南阿蘇中のスピリット

先日、南阿蘇村の保護司会の皆様が「社会を明るくする運動(以下、社明運動)」の一環として生徒会執行部の生徒らとの懇談のために来校された。まず会長の渡邊さんが、保護司とは日頃どのような活動をしているのかをはじめ、今回の社明運動について詳しく説明してくださった。さらに、同じく保護司の長尾さんから「薬物乱用防止」について資料をもとに熱心にお話しいただき、懇談を経て会は終了した。

「すみませんでした。時間が長くなってしまって」

この懇談会は昼休みに行ったため、五校時の授業にやや食い込んでしまい、保護司会の皆さんには随分と気を遣わせてしまったが、「生徒さんが熱心に聴いてくれるから、とても嬉しかった」と続けられた。わたしは生徒らの後方に位置していたため直接表情を目にすることはできなかったが、話をされる方々や生徒の対面に座っておられた他の保護司の皆さんの表情は、確かにこのことを十分に悟らせるものだった。

「みんなが真剣にうなづいて聴いてくれたけん、なんだかほっとしました」と、ある保護司さんが帰り際に声をかけてくださった。そして、「また学校に来たくなくなった」と言い残して、笑顔とともに学校を後にされた。最高の賛辞だと思った。

今週火曜日に校内人権集会を行った。各学年、各学級で行ってきた人権学習を通じて、何を学び、どのようなことを考え合い、そしてこれからのような学級

学年そして学校にしていくなのか、全校生徒と先生方全員で学び合う貴重な学びの場となった。

わたしも、三年生の横で集会に参加した。人権ボランティア委員長のあいさつに始まり、まずは一年生の発表があった。全校生徒の前に立って話す時の緊張感が、体育館中に漂い、聴者であるわたしまでもがドキドキしてやまない。しかし、そんな一年生を固唾をのんで見守りながら優しく聞き入る三年生たちの姿が、わたしの目の前にあった。「先輩たちが、こうして聴いてくれるなら安心して話せる」そう確信した。そんな雰囲気の中で、その後の二年生、三年生へと会は進んだ。

「ここで、各学年の発表を聴いて、考えたことや感想を伝え合う時間をとりたいと思います」と、司会が発表を促した。即座に考えたことを話さなければならぬ難しさからか、沈黙が訪れる。そこで、すかさず荒木先生が後方から挙手してその場に立たれた。一斉に体の向きを荒木先生の方へ向ける生徒たち。そして、話しが終わると、一同はそっと前へ向き直す。次に松村先生が、同じく後方からお話しされた。やはり生徒らは体ごと松村先生に向く。その後は、人権ボランティア委員さんをはじめ秦先生のお話や各学年からも自らの思いを話してくれる人が現れ、その度に真摯に話し手に向き合いながら会は進んだのだ。温かいなと思った。そして、このことは今だけやろうと思ってもできることではなく、日常の延長線上なのだろうとも思った。

話を聴くことを通じて、人とのつながりを豊かにし、それがひいては自分の人生も豊かにするのだろうと思った。南阿蘇中では、そんな精神をこれからも大切にしたいと思った。またひとつ、生徒と学んだ。さっそく、今日から実践。

■昨日の大雨に伴う遅延登校に際しましては、急な対応でご迷惑をおかけしましたことを深くお詫び申し上げますとともに、保護者の皆様の理解とご協力のおかげで、スクールバスの安全運行と生徒の安全な登校を確保することができましたことに心より感謝申し上げます。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。